

イギリスの大学図書館における情報部署との連携体制および学習環境の整備について

北島, 光朗
九州大学情報システム部情報基盤課デジタルライブラリ担当

<https://hdl.handle.net/2324/1560582>

出版情報：九州大学職員海外研修(自主課題研究)実施報告書. 平成27年度, 2015-12-21
バージョン：
権利関係：

平成 27 年 12 月 21 日

平成 27 年度九州大学職員海外研修（自主課題研究）実施報告書

情報システム部情報基盤課デジタルライブラリ担当

北島 光朗

【研修期間】 平成 27 年 11 月 14 日～平成 27 年 11 月 21 日

【訪問先機関】 ウェストミンスター大学

サセックス大学

マンチェスター大学

1 研修概要

研究テーマ『イギリスの大学図書館における情報部署との連携体制および学習環境の整備について』

九州大学では全学共通 ID や無線 LAN 接続サービス等、情報統括本部が様々なウェブサービスを提供しており、図書館内でも講習会の開催や窓口対応によりサービスの利用支援を行っている。また、学外から本学が契約する学術情報データベースにアクセスできるリモートアクセスサービスのように図書館と情報統括本部が連携して提供しているサービスもあり、学生及び教職員の快適なウェブサービス利用環境整備のために、様々な場面で図書館と情報部署との円滑な連携が必要となっている。現在本学ではデジタルライブラリ担当という情報システム部内の図書館担当ポストや、図書館連携事業室という情報統括本部と図書館の教職員で構成される事業室などの連携体制があるが、海外の大学ではどのように図書館と情報部署が連携し、サービスの利用環境を整備しているのかということ进行调查する。また、実際に提供されている注目すべきサービスや、職員による利用者へのサポート体制についても調査することとした。

対象は高等教育における ICT の利活用が日本より進んでおり、支援体制も整備されているという調査結果*1があるイギリスの大学とした。

*1

文部科学省「高等教育機関等における ICT の利活用に関する調査研究」

報告書 5 第 3 章 p.239-246

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1347642.htm

2 事前準備

2.1 訪問先選定

おおよそ九州大学と近い規模であり、事前の調査から図書館のウェブサービスやその利用支援体制が充実していると思われる大学の図書館を訪問先として

選定した。

ウェストミンスター大学	図書館と情報部署が「Library & IT」という共同のウェブサイトを運営している。また、図書館サービスやITサービスの講習会が充実している。
サセックス大学	本学図書館でも昨年度開始した Chromebook の貸出サービスを実施している
マンチェスター大学	図書館横に新しくラーニングcommonsが開館しており、多様な情報機器整備や DigiLab というイノベータイブな取り組みが行われている。

2.2 訪問先とのコンタクト

訪問のアポイントメントは全て Eメールのやり取りで行った。各図書館の問合せ先のメールアドレス宛に、本研修の概要や研究したいテーマ、訪問を希望する候補日等を記載した訪問依頼メールを送信した。上記訪問先以外にもいくつかの大学宛に依頼メールを送信したが、忙しい時期に重なるとのことで謝絶されるケースや、返信をいただけないケースもあった。依頼開始からスケジュール確定までは一ヶ月以上を要した。

3 研修スケジュール

11/14 (土)	福岡発
11/15 (日)	ロンドン着
11/16 (月)	ウェストミンスター大学 訪問 Fiona O'Brien 氏 (Academic Liaison Manager) Ida Kwan 氏 (Senior Academic Liaison Librarian) Gerard Bennett 氏 (Systems Librarian)
11/17 (火)	サセックス大学 訪問 Gráinne Mac Dermott 氏 (Planning and Support Services Manager) Tim Grave 氏 (Systems Support Manager) David Guest 氏 (Senior Information Delivery Manager)
11/18 (水)	移動日 (ロンドン→マンチェスター)
11/19 (木)	マンチェスター大学 訪問 Martin O'Dwyer 氏 (IT Support Coordinator)
11/20 (金)	マンチェスター→ロンドン ロンドン発
11/21 (土)	福岡着

4 ウェストミンスター大学訪問



4.1 大学概要

University of Westminster (国立大学)

1838年設立

学生数：約 25,000

キャンパス所在：ロンドン

ウェストミンスター大学は 150 以上の国の 5000 人を超える留学生が学ぶ、イギリス国内でも非常に国際性豊かな大学である。ロンドンの街中に Cavendish、Harrow、Marylebone、Regent Street の 4 キャンパスがある。

● 訪問先

今回はサイエンステクノロジーの分野がある Cavendish キャンパスの図書館を訪問した。大学の建物入口に入館ゲートが設置されており、学生証が無ければ自由に構内に入れないようになっていた。

4.2 図書館・情報部署の組織体系

図書館 (Library & Archive services) 職員は 139 名、情報部署 (Information Services) 職員は 97 名が在籍している (2015 年 12 月)。

Information Services Department の部署内に Library & IT という組織があり、この担当職員は情報部署所属でありながら図書館職員と同じオフィスで業務を行っている。この組織では図書館システムやネットワークの管理、図書館と情報部署の共通ウェブサイト (「Library & IT」) の運営を担当している。これ以外にも図書館職員と情報部署の職員はプロジェクト単位でチームをつかっており、あらゆる図書館業務にて協働している。一人の職員が複数のチームに所属しており、チームは通常業務のためのものから期間限定のものまで数多くある。

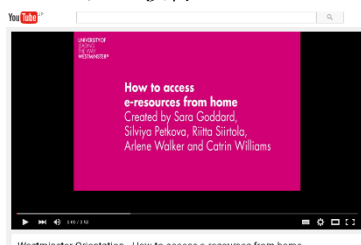
4.3 サービスの特色

● Support and study skills

ウェストミンスター大学図書館の特長の一つは、図書館サービスや IT スキル、論文やレポートのライティングに関する講習会が充実していることである。予約が必要な講義形式ものから、毎日決まった時間に実施される予約不要な Drop in session まで、様々な形で実施されている。図書館内の Academic Liaison Team という組織がこのような講習会の企画、運営を担当している。特にビジネススクールを持つ Marylebone キャンパスでは、毎日のように講習会が開催されている。

講習会の広報はウェブサイトやちらし、学内の広報用ディスプレイにて行っている。学生への一斉メールによる広報は、量が多すぎてノイズになるとかえって避けられてしまうと考え、あえて実施していないとのことであった。

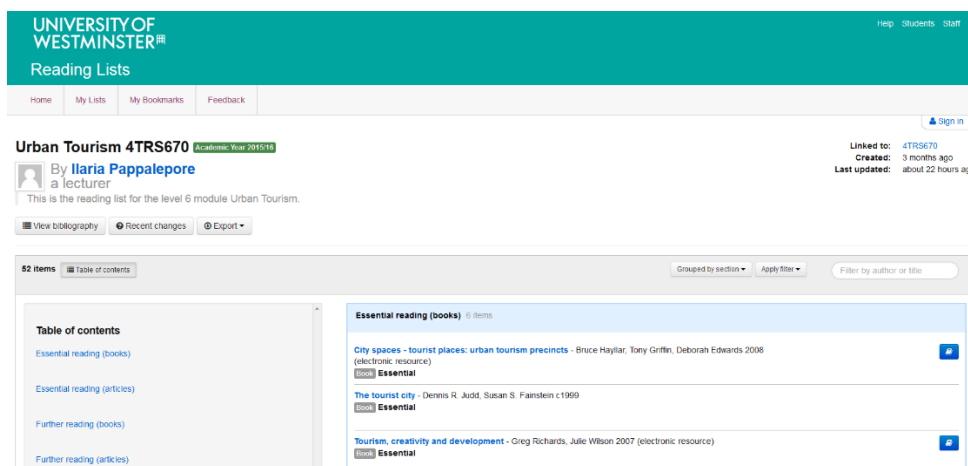
● ビデオ教材



<https://www.youtube.com/watch?v=Nj2SEiw-mr0>
学外からの電子資料のアクセス方法紹介

Academic Liaison Team は、講習会のような対面での利用支援のほかに、図書館やデータベースの使い方のビデオ教材を大学の Youtube アカウントから多数提供している。利用者が場所や時間を選ばず学べることから、ビデオ教材は今後も更に充実させていく予定であるとのことであった。

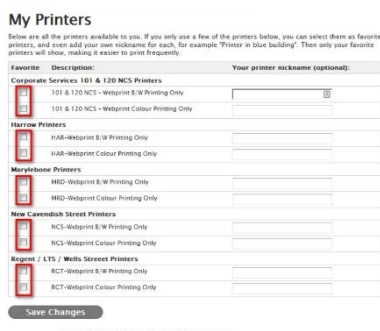
● Reading Lists



<http://readinglists.westminster.ac.uk/lists/76B33477-001E-AF1C-9875-C84FE1B394C6.html>

授業で使用する参考資料が授業ごとにまとめられているウェブサイト。このサービスを使い、学生が簡単に教材の電子資料や図書館所蔵情報にアクセスできるようになっている。個人アカウントでログインすれば、授業をお気に入り登録もできる。サービスの開発元は TALIS。イギリスでは広く使用されているようで、大学として現在かなり力を入れて整備しているとのことであった。

- ウェブプリント



Cavendish Library プリンタ

Library & IT > Study and Support Skills >
Guides and tutorials より

インターネット環境があれば、自宅や外出先からでも大学の **Web Print Portal** へドキュメントをアップロードし、学内のプリンタで印刷物を出力することができる。また、ドキュメントを **Eメール** で送付することでもポータルシステムに印刷物が保存できる。学内の特定のプリンタを指定して印刷ジョブを実行後、送信先のプリンタに学生証を認証させることでプリントアウトが完了する。印刷料金は、事前に **Pay Station** に学生証を認証させて課金しておく必要がある。プリンタは京セラ社製であった。

- オープンアクセス

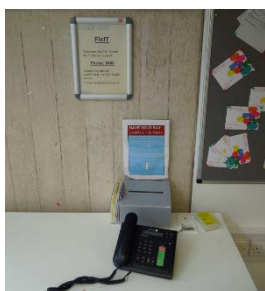
現在、学術情報を自由に流通させることを目指すオープンアクセスへの動きが世界で広まりつつあり、欧州全体でも促進されている。ウェストミンスター大学ではオープンアクセスの紹介ウェブサイトを作成して周知に努める等、積極的に普及活動を行っているようであった。

4.4 図書館設備 (Cavendish Library)

- Learning Commons / Quiet zone / Silent zone

グループで議論ができるラーニングコモンズエリア、静かに自習するためのエリア、コンピュータの使用も禁止された完全静寂エリア等、利用者の目的に合わせた多様な学習スペースが作られていた。

- Fix it



コンピュータやウェブサービスの問合せを、24時間電話で受け付けているコーナーを設けていた。職員が不在にしている時間帯などでも対応が可能となっている。

- 図書館職員／情報部署職員オフィス



図書館職員と情報部署職員が同じ空間で働いている様子は新鮮であった。オフィスを見学させていただいた時はお昼休みで食事中であったにも関わらず、どの職員の方もフレンドリーにご挨拶してくださり、職場内の風通しの良さを感じられた。

4.5 スタッフ

今回の訪問では、下記スタッフの方々にご対応いただいた。

Fiona O'Brien 氏（Academic Liaison Manager）

Ida Kwan 氏（Senior Academic Liaison Librarian）

Gerard Bennett 氏（Systems Librarian）

図書館ツアーをご対応いただいた Ida 氏は、訪問終了時にも、お勧めの訪問地として近くにある英国図書館までの道のりをご案内くださる等、非常に親切であった。



4.6 所感

図書館と情報部署の職員が同じオフィスで働いており、非常に良い関係にあると感じた。Academic Liaison Team による講習会やビデオ教材への取り組み、Reading Lists の整備、オープンアクセスの推奨など、学習環境を充実させることや ICT の利活用に対する積極性を感じた。

Fiona 氏の、「情報部署が管理しているサービスであっても、図書館の中で使われるサービスであれば、利用者にとっては図書館のサービス。問合せがあったときにすぐ回答できるような環境をつくっておくことが重要だ」とのお言葉が印象的であった。

5 サセックス大学訪問



5.1 大学概要

University of Sussex (公立大学)

1961年設立

学生数：約 12,000

キャンパス所在：ブライトン

- 訪問先

キャンパス内のメインの図書館に訪問した。授業期の平日は 24 時間開館している。

5.2 図書館・情報部署の組織体系

図書館 (Library) と情報部署 (IT Services) は独立している。職員数は、図書館が約 80 名、情報部署が約 100 名。図書館の近くに IT サポートセンターがあり、図書館内で解決できないシステムやネットワークのトラブルがあった場合は、センターの職員がかけつけるようになっている。

図書館内で新しい情報サービスの提供を始めるときなど、必要に応じてプロジェクトを協働する体制であった。

5.3 サービスの特色

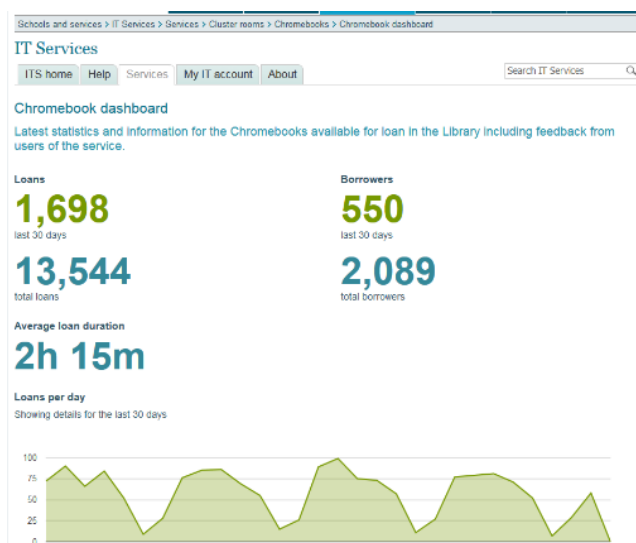
- Chromebook 貸出サービス

2014 年からオンライン環境下でのみ使用できるノート PC 「Chromebook」の貸出を行っている。Chromebook の貸出サービスは本学図書館でも 2015 年 4 月から実施している。

貸出端末数は 24 台。Lapsafe 社の Diplomat というノート PC 貸出専用ロッカーを図書館内に設置し、セルフサービスで貸出している。端末は棚の中で充電され、学生証を認証させることでドアが解錠される仕組みとなっている。

Chromebook 端末は複数のメーカーから発売されているが、バッテリーの持続時間が長い DELL のメーカーのものを採用しているとのことであった。

2015年11月2日～12月1日の30日間において、貸出者数550名、貸出総数1698回という統計データを確認した。(2015年12月2日確認)



※本学図書館の場合

提供端末：9台

貸出回数：50～80件／月程度

(カウンターにて貸出)

Chromebook 貸出統計 (毎日更新)

<http://www.sussex.ac.uk/its/services/clusterrooms/chromebooks/dashboard>

● ウェブプリント

ウェストミンスター大学と同様、ウェブプリントサービスが導入されている。ただしこちらでは端末を学内のネットワークに接続しなければならず、自宅や外出先からのドキュメントのアップロードやEメールでのドキュメント送付には対応していない。また、事前に学内の端末から印刷機能を利用し、印刷用のアカウントを作成しておく必要がある。印刷料金は、学生ポータルシステム (Sussex Direct) にてクレジットカード等で課金する仕組みとなっている。

● Reading Lists

ウェストミンスター大学と同様、こちらでも TALIS の Reading Lists が使用されていた。

● オープンアクセス

オープンアクセスの担当者にも少しだけお話を伺った。訪問した前日にもオープンアクセスをテーマとしたセミナーが開かれるなど、注目されているトピックではあるが、研究者や出版社の理解を得ながら進めるのはなかなか難しいと実感しているとのことであった。セミナー内でも、「オープンアクセスはエキサイティングだ。しかし、実現には困難を伴う」という旨のお話があったと伺った。

5.4 図書館設備

図書館内には閲覧席が約 2000 席設置されており、かなり大勢の学生が自習している様子が見て取れた。以下、特徴的だと感じた点を挙げる。

- 入退館ゲート

入館・退館時それぞれカードを認証させるようになっており、職員が在館者数をリアルタイムで確認することができた。12 時ごろには約 670 名もの学生が図書館内に滞在していた。また、カードを忘れた学生のために、臨時バーコード発行用の機械が設置されていた。学籍番号とパスワードを入力するとバーコードが出力される仕組みとなっている。

- RFID

館内資料には RFID タグが入っており、自動貸出処理が非常にスムーズであった。また、返却 BOX に投函された資料が機械で読みとられ、所在情報を判別してベルトコンベアでエリアごとに分類されるようになっていた。

- Chromebook 貸出ロッカー

実際に Chromebook のセルフ貸出ロッカーを見せていただいた。ロッカーは貸出カウンター付近のアクセスしやすいポイントに設置されていた。見学させていただいている間にも 2～3 名の学生さんが貸出や返却に来られ、サービスの盛況ぶりが伺えた。

5.5 スタッフ

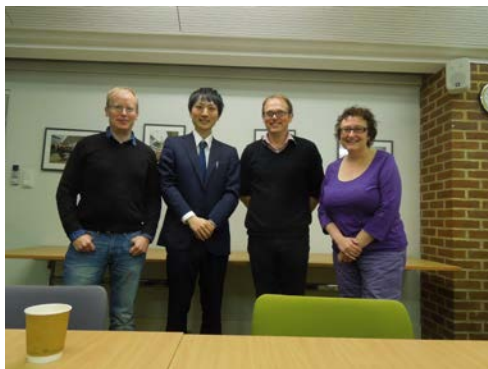
訪問では下記スタッフの方々にご対応いただいた。

Gráinne Mac Dermott 氏 (Planning and Support Services Manager)

Tim Grave 氏 (Systems Support Manager)

David Guest 氏 (Senior Information Delivery Manager)

David 氏のみ情報部署所属ではあるものの、三者は非常に親密であるように感じられた。昨年 Chromebook 導入以降、今のところ大きな協働プロジェクトの予定は無いが、お互いいつでも業務に協力する準備はできているとのことだった。



5.6 所感

カード不携帯者のための自動発行機や、RFID タグを利用した返却ポスト投函資料の自動仕分け、Chromebook セルフ貸出サービス等、自動化できるものはできる限り自動化するということが徹底されているように感じた。

Chromebook 貸出については、サービス開始から間もないにもかかわらず非常に好評であることから、学生の学習意欲の高さと、職員による学生のニーズを汲み取る力および効果的な実現方法を考案する能力の高さを感じた。

キャンパスはイギリス南部のリゾート地ブライトンに位置しており、非常に広大で緑豊かであった。メインの図書館では利用者がゆったりと過ごせるスペースがあり、学生が伸び伸びと学習に励んでいる様子が見てとれた。Grainne 氏の、私はこの図書館が大好き、ここで働くことができ幸せだという言葉が印象的であった。



館内写真（サセックス大学図書館提供）

6 マンチェスター大学訪問



6.1 大学概要

The University of Manchester（国立大学）

1824 年設立

学生数：約 38,000

キャンパス所在：マンチェスター

QS 社による世界大学ランキングでは、毎年 40 位前後を記録している。理工系の分野が充実しており、世界で初めてプログラム内蔵式コンピュータを稼動した大学でもある。

- 訪問先

- ・ 図書館

キャンパスの中心にメインの図書館がある。2016-2019 年に大幅改修予定。

- ・ ラーニングcommons (Alan Gilbert Learning Commons)

2012 年に建設された、多様な情報機器やグループ学習スペースを有する施設。優秀かつ先見性のあるリーダーを生み出す場となるようにという願いを込め、2010 年まで学長を務めた Alan Gilbert 氏のお名前がラーニングcommonsの名称となっている。

6.2 図書館・情報部署の組織体系

図書館と情報部署は独立して存在してはいるが、図書館内にも中規模の情報系専門の部署が存在しており、図書館内のネットワーク管理や技術的なトラブルの際にも図書館内で対応できるようになっている。図書館職員数は約 340 名と、今回訪問した大学では最も大規模であった。

6.3 特色

- DigiLab



<http://www.library.manchester.ac.uk/services-and-support/students/services/digilab/>



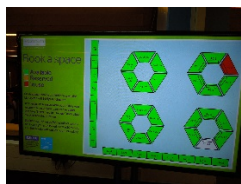
https://www.youtube.com/watch?v=437yzQUEBck&index=4&list=PL5JZDOVO6NB_mksExtWfOvKaoQXn

ラーニングcommons内にて、学生が開発した最新テクノロジーの交流イベント等を行っている。様々な所属の学生と一緒に何かを生み出す場をつくるのは図書館こそが一番相応しいとの考えから、図書館がこのプロジェクトを立ち上げたとのことであった。DigiLab の紹介動画を見せていただいたところ、シリコンバレーのそれのような非常にクリエイティブな雰囲気を感じられた。

- Eureka! Library Innovation Challenge

2013 年～2014 年に実施された、学生が図書館サービスに取り入れたいアイデアを募集するコンテスト。これにより実現したサービスの一部を紹介する。

- Book a Space



ミーティングルームなどでなく、通常の閲覧席を予約することができるシステム。このコーナーには多くの学生が滞在していた。

- Textbook Rescue



卒業する学生に授業で使用したテキストブックを寄贈してもらい、在学生在が再利用できるようにするという企画。

- Zzz Zone (nap pod)



ポッドの中で 20 分間仮眠をとることができる。タイマーをセットすると自動的に頭部のカバーが閉じ、視界を遮ることができる。使用中はヒーリングミュージックなどを流すこともできる。

- ウェブプリント

ウェストミンスター大学、サセックス大学と同じくウェブプリントサービスが導入されている。印刷するドキュメントは家や外出先からのアップロード、Eメールでの送付どちらにも対応しており、印刷料金は、図書館等でも設置している入金専用の機械もしくは **ePayment system** というオンラインシステムにて課金できる。更に、出力先のプリンタを指定する必要はなく、学内の空いているプリンタを選んで印刷を実行することができるなど、今回訪問した3大学の中では最も高機能であった。

- Reading Lists

ウェストミンスター大学、サセックス大学と同じく **TALIS** の **Reading Lists** が採用されていた。イギリスの大学では広く使われているサービスのようなのである。

6.4 図書館／ラーニングコモンズ設備

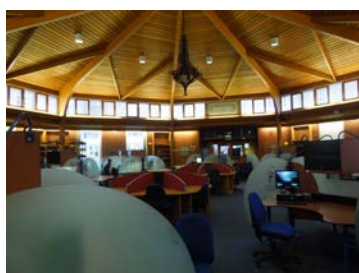
図書館およびラーニングコモンズの見学をさせていただいた。それぞれ、特徴的だと感じた点を挙げる。

6.4.1 図書館

- RFID

館内資料には RFID タグが入っていた。サセックス大学と同様、返却 BOX で機械の読み取りによりエリアごとに自動的に分類するシステムが導入されていた。

- 大学院生専用エリア



大学院生のみが利用できる、離れのようなエリアがあった。PC が使える席を含め、全席に仕切りが設置されており、集中して自習できる環境となっていた。

- グループ学習室



通路側の壁はガラス張り



一週間先の予約状況

メインの図書館では 14 のグループ学習室があり、1 部屋につき最大 8 名が 3 時間利用できる。写真のように、一週間先でも予約がいっぱいになるほどよく使われているようだった。

- Book a Space

Eureka! Library Innovation Challenge で採用された、予約可能閲覧席エリア。空いていれば予約者以外も使えるらしく、多くの学生が滞在していた。

6.4.2 ラーニングコモンズ

- 多様な情報機器の整備



グループ学習室内の PC



本体は隠し、端子のみ露出させている



利用者スペースの PC

グループ学習室や自習スペースに、様々な形でコンピュータやプロジェクタが設置されている。写真のようにコンピュータ本体は収納し、音声出力端子や USB ポートのみ露出させるような特殊な設置の仕方をしている。既製品でなく作成を依頼しているとのことであった。

館内には 400 台以上のデスクトップコンピュータが設置されており、大学のアカウントで利用できる仕組みであった。



充電された状態で格納されている

マンチェスター大学でも、ノート PC のセルフ貸出サービスを実施していた。サセックス大学と同様、Lapsafe 社のロッカーが使用されていた。

- ウェブプリント対応のプリンタ



メニュー画面



スキャン後の画像データを設定可能

左の写真は 6.3 で記載したウェブプリント対応のプリンタ（HP 社製）である。学生証をリーダーに読み込ませることで自身のアカウントへログインでき、事前に準備しておいた印刷ジョブを実行できる。

このプリンタではコピーやウェブプリントだけでなく、紙の資料をスキャンして電子データ（pdf、jpg 等）に変換し、電子メールに添付して送信する機能なども有しており、非常に多機能であった。

- Zzz Zone (nap pod)



Eureka! Library Innovation Challenge で採用された仮眠設備。実際に利用させていただいたところ、座り心地も良く非常にリラックスできる環境であった。利用者には好評だが非常に高価であるため、1年単位のリース契約で設置しているとのこと。

- 空調



空調には、パッシブチルドビームという対流の原理を利用した低流速の冷却装置（Halton社製）が導入されている。パッシブチルドビームとは、上昇した暖かい空気が装置内のビームで冷やされ、再び床に降下する仕組みであり、空調の風を嫌う利用者にとって快適な

室温調整が可能となる。チルドビームは、日本での導入はまだ多くない。

（導入例：くにたち中央図書館など）

- 雨水の再利用

建物に降り注いだ雨水を蓄えることができ、前述のパッシブチルドビームの冷却水や、お手洗いの水として再利用されている。

- 壁面のデザイン



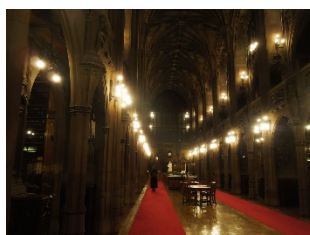
著名な卒業生の名言や、学生によるイラストが壁面や床へデザインされており、学習意欲や創作意欲を掻き立てられるような雰囲気であった。

6.5 スタッフ

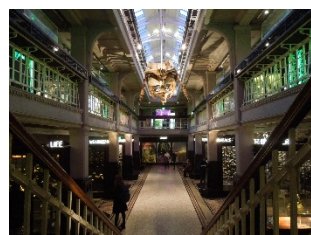
訪問ではラーニングコモンズ所属の下記スタッフの方にご対応いただいた。

Martin O'Dwyer 氏（IT Support Coordinator）

お一人で図書館、ラーニングコモンズ、さらに情報部署のオフィスにまでご案内いただいた。聞きたいことがあれば、帰国してからも遠慮なく連絡してほしいと再三念を押され、非常に親切であった。訪問終了時には、マンチェスター大学博物館や、大学の敷地外にあるマンチェスター大学ジョン・ライランズ図書館についてもご教示いただき、同日そちらも見学することができた。



ジョン・ライランズ図書館



マンチェスター大学博物館

6.6 所感

自律的学習を促進する場としてのラーニングコモنزの存在を非常に大きく感じた。デザインと機能性どちらも洗練された情報機器の提供、DigiLab や Eureka! コンテストによるクリエイティビティの誘発など、学生にとって非常に刺激のかつ魅力的な場となっているようだった。元学長の Alan Gilbert 氏や DigiLab 紹介動画に出演されていたプロジェクトマネージャー Ros Bell 氏の、「学生が所属の垣根を越えて切磋琢磨しあえる場は図書館が作る」という思想・決意がラーニングコモنز内のあらゆる空間からありありと感じられた。

7 まとめ

7.1 結論

今回訪れた図書館では、以下3通りの方法で情報部署との連携体制がとられていた。

- 情報部署内に図書館担当の組織があり、図書館内に滞在して協働している（ウェストミンスター大学）
- ITセンターが図書館に隣接しており、必要に応じて協働する（サセックス大学）
- 図書館内に情報系専門の大きな組織を有している（マンチェスター大学）

それぞれの図書館や情報部署職員のお話を伺い感じたことは、どのような体制であれ、同じミッションに向かってサービス向上に努める、という意識がお互いにあるということであった。

私の立場は、情報システム部所属で図書館に滞在すると言う意味ではウェストミンスター大学と同様である。このポストは本学では現在3名しかいないが、ウェストミンスター大学ではこれを非常に大きな組織にしており、図書館と情報部署の垣根を無くして図書館利用者を手厚く迅速にサポートできる体制を作る、という意識を感じられた。図書館と情報部署との関係性という点では、本学はサセックス大学のように“必要に応じて協働する”体制に近い。本学も Chromebook 貸出サービスの成功例のように、図書館と情報部署が協力して利用者のニーズの把握と最適な実現方法の確立に努めることで、学生にとってよりよい学習環境を整備することができればと思う。

7.2 提言

今回訪問したイギリスの大学図書館のサービスの中で、特に参考にしたいと感じたものは以下の4点である。

- ウェブプリントサービス
インターネット環境があれば、自宅からでもドキュメントをアップロー

ドでき、学内のプリンタにログインして印刷できる、というサービスは非常に魅力的であると感じた。自宅からのデータ送信には対応していないが、学内 LAN を利用したオンデマンドプリントサービスは、国内の国立大学では長崎大学や宮崎大学、鳥取大学などでも導入されている。

ペーパーレス化が進んでいる今日でも、試験期になると図書館のプリンタに長蛇の列ができることも珍しくない。また、印刷をするためだけに図書館まで足を運ぶ学生もよく見受けられる。図書館内に限っては、学内無線 LAN に接続されていれば図書館のプリンタへデータ送信できる仕組みを構築しているが、端末へのプリンタドライバのインストール等の設定作業が必要であること、図書館内のみでしか利用できないことなどから、あまり多くの学生は利用していないようである。自宅や外出先からでもデータをアップロードでき、かつ学内のあらゆる場所で印刷ができるようになると非常に便利である。全学共通 ID や学内無線 LAN が整備され、PC 必携化が進んだ今、ウェブプリントサービスはこれらと相乗効果をなして利便性を発揮できるように感じる。全学的な導入のためには多大なるコスト、労力がかかることは容易に想像がつくが、それだけの価値を感じさせるサービスであると感じた。

- **ビデオ教材**

どの図書館でも Youtube により図書館サービスの利用案内ビデオを提供していた。本学図書館でも、全く利用したことのないサービスは使ってみるまでの敷居を感じる、という利用者の声を聞くこともあり、留学生を対象としたアンケートでもこういったチュートリアルを提供を求める声がある。本学も公式 Youtube アカウントを有しており、すぐにでも実現可能な条件が整っている。ビデオ作成の労力と効果のバランスを考えつつ、長く利用法が変わらないようなサービスの利用イメージ動画は作成する価値があるのではないかと感じた。具体的には、図書館ウェブサイトの基本機能紹介や、現在伊都キャンパスに建設中の新中央図書館の設備・サービス紹介ビデオなどが作成できればよいように思う。

- **Reading Lists**

授業で使用するテキストの電子資料や図書館の所蔵情報が授業ごとにまとめられている、というのは、授業やテキストの情報を探す学生にとっても、資料を提供する図書館にとっても非常に有益であると思われる。イギリスの大学で使用されていたものと同じ TALIS のシステムを用いて一から整備するのは難しいだろうが、現在使用しているオンラインシラバスと、電子資料を含めた図書館の所蔵情報をつなげられるような仕組みがあれば、授業の事前準備に役立つと感じた。

- DigiLab

多様な学生が集い、互いにイノベティブな技術を披露し合う場として図書館やラーニングコモンズが活用できるという思想は大いに共感できるものである。本学でも Quricon のような研究内容を披露し合う学生の活動が、図書館内のラーニングコモンズ等で定期的に行われている。今後も図書館が学際交流等の場としての役割を果たし続け、特に建設中の新中央図書館に整備予定のアクティブラーニングスペースがそのような場として活用されればと思う。

7.3 最後に

国内外含め、他大学の図書館に単独で訪問調査するという業務は初めての経験であった。先方に自力で連絡を取り、調査内容を練って聞き取り調査を行った経験は今後活かすことができると感じている。今回の調査は訪問先がなかなか定まらなかったうえ英語での情報収集であったこともあり、事前準備にやや苦勞した点もあった。今後このような調査の際は、調査目的をしっかりと絞り、様々な結果を想像しながら情報収集を入念に行い、持ち帰りたいものをより深く理解・吸収して提案できるよう努めたい。

今回、欧州全体の動きを見通しつつ自館の学習環境向上に奮闘する多くの図書館職員と出会い、非常に刺激を受けた。これまで以上に、もっと広い世界の流れ、今目の前にいる学生、このどちらにもしっかりと目を向け業務を遂行していこうと思う。

7.4 謝辞

本研修に参加させていただくにあたり、研修全般でお世話いただいた国際交流推進室の高原様、面接の際にご助言いただいた秦国際企画課長、中野課長補佐、出張手続きをお世話いただいた国際企画課企画総務係の皆様、本研修に快く送り出してくださった情報システム部・附属図書館の皆様、ならびに現地でお世話いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

本研修を通して得た経験を自らの財産とするとともに、誠に微力ではございますが九州大学の発展のため精進いたします。この報告書が今後どなたかにとって少しでもお役に立ちましたら幸いです。このような貴重な機会をお与えいただきありがとうございました。